

詩
誌

四
井

VOL. 4

詩誌 四囲 目次

屋根の未来

中島悦子

3

たけのこ他

近藤弘文

7

抒情小曲集^{シヨウト!ピース}

高塚謙太郎

27

港のひと

甘楽順治

38

微笑その他

阿部嘉昭

49

後記

60

屋根の未来

中島悦子

屋根の未来

放射能の雨は降る。堂々と。今となって隠すことはなにもない。こんな雨の日には、シヨツキングピンクの長靴を股まで履いた女が無言でバスに乗ってきて、つかまる場所もなく立っている。この抗議のスタイルをお上が見ることはない。だって、大衆のバスだよ。ここは。大衆は、ある場所でバスごと棄てられたのだよ。すでに。

私の大正生まれの父は、「いつも最悪のことを考えて行動しろ」と命じていた。昔はそれがどういう意味がよく分からなかった。決断力が鈍く、心が弱く、要領の悪い私はいつも叱責されていた。今では、その意味はとてよく分かる。「最悪」とは過去から未来までくまなく見渡して最も悪いこと。よかれと思っけていても、致命傷の結果が隠れていることはあるし、どん底に突き落とされる可能性も常にある。誰からも助けられないことを考えて、覚悟して行動せよ。父の教えは軍隊的精神論も入っており、どんな最悪の負け戦でも耐えられる心をもっておれということを多分にふくんできたと思う。

小さなソーセージを切る時、私は自分の指と区別がつかなくなりそうでこわい。どれがソーセージの肉の肌色で、どれが自分の指の肌色か。その感触のすべては繋がっていて恐怖ですらある。ソーセージを細かく切る。

ようこそ 冷徹。

お茶にもセシウム。今までだつて入っていたんだから安心せよと少しくらい多くても気にするなど全部あとから通達。静かに静かに茶葉に降りそそぐ雨音。季語もさぞ変質しただろう。変質しなければならぬ。これからの雨は、喜雨も白雨も村時雨も、雨鷺も横時雨も過去とまるで違う。命のあとから降る。

ようこそ 冷徹。

もっと汚い言葉を考えていますよ。もっとひどい言葉で飾ってあげたいですよ。でも、案外ないのです。すべて横滑り。なだれ。はるか上空のカラスの被爆量を量るお役人様に何が分かるか。人間の言葉で逃げるとも言ってくれなかつたですね。なだれ。心とは、あなたがたにとつて何ですか。なだれ。

土をほりかえず。ませかえず。もう雨は染みこんだのだ。地中深く、これからも降り注ぐのだから、どこからきりはなすことができるのだ？ 雨がふるたびに。

私のような物の数でもない者が乗るバスの中から、くすんだ窓の外を見る。風景も私も同じほど汚れてしまったと思う。透明な傘が次から次へと無言で乗り込んでくる。私のような者の日常の朝とは、傘の数さえお互い数えない。どんななおしあいへしあいしても。ここは、透明な傘しか見えないバスだから。ここは、透明なバスだから。知り合いさえ、みんな透明で目も合わせない。透明なまなざしが見えないまま行き交う。

ようこそ 冷徹。

死んだ父には、また叱責されるだろう。雨のたびに履く長靴は重い。今になって私は、棄てられた野放しの牛そのものだったと気づいた。家のない人を気の毒に思っていたのに、自分も屋根のない家に住んでいたと気づいて。雨にぬれながら、汚い言葉を捜しているだけとは。

たけのこ他

たけのこ
いらない
ん
へっっている
おくれる
あやまる
こまった
ぶつくさ
ゆき

近藤弘文

たけのこ

かたることは

こわれたにわとりにふれる

ようなちんもくがもれだして

それをとめなくては

ならない

とは

だれのことばか

きくけこ

たけのこ

いらない

いらない

ものはいらない

というさだめにしたがつて

いえをでる

すると

とたんにいらない

ということがふりそそいで

ずぶぬれになる

ずぶぬれになって

まっつている

ん

ん

といたただけ

だから

ほっといほしい

どうしたって

あいているあなを

わたしははずれ

のぞくだろう

また

いつものよあけだ

くつてゐる

めをこすり

つづける

ことをこすり

つづける

としだいにみえる

ようになるのだろうか

だとしたら

そこでへっている

ものはなんなのか

おくれる

おくれてしまふ
ということから
おくれることは
わずかなかたむきを
はっけんした
というよろこびからも
おくれてしまふ
のである
そういうものだ
とおもう

あやまる

あやまる

ことはただしい

のだらう

くのじにまがった

あのひとは

まちがったまま

いずればたんとおりたたまれて

だれかの

むねのうちにしまわれる

はずである

こまつた

こまつた

こまつた

といいながら

ちつとも

こまつていない

ことに

こまつた

どうしよう

ぶつぐさ

ぶつぐさいって
ないで
はたらけ
っていわれても
まずそのぶつぐさ
のしょうたいが
しりたいところですよわたしは
なにと
ぶつぐさ

ゆき

ゆき

あるくこと

へやのなかで

あめをきくことあぼがど

ほたる

しょうにゆうどう

しおひがり

ゆうれいがでてくるはなしあめ

があがつてはれたあとのみずたまり

くろねこ

あ ゲ 0 1 5 4 3 2 1

飯田保文

放射線はお前の性さフツ顔は大きいけど眠狂四郎さねえ佃煮で
も食おう最近のは甘くて往けねえあの奥さんも男好きだった息
子4人友馬鹿出汗世間は冷たく確かに顔は悪い頭は悪い身体グ
ズグズ文化社会言語が列席するだけ動物意識の局所性のみ打ち
続く寂しい葬送だこの鼠取り心は夜を入れろ！

夜光生活に逃げた哺乳類が
時間に生きた始りは
死は本当とは時間的だ
君に渡すスペルマがニコニコ
子供に成つて返る僕が
抱き死ぬ宇宙オッパイから
泡宇宙が生まれる卵よ！
量子蛙に成りたい
今が有るか月光よ

何一つ繋ぎ止める物がない河一〇〇パーセント死ぬという奇妙
確信が流れ行く

人間の構造を鼻毛が上手く切れなかった宇宙の午後オナニーす
れば

涙に汚れる美女のグラビアよ陰唇捲れば無を塗りあげる
時間の定性が持続でなく意識は否応もなく持続する狂い
子

量子荒れ狂う沖の雅也のメタンハイドレート火柱癌発症率吹っ
飛び美しい！世界精神背負いの拝一刀鼠奥さん毛散らし場所を
あける！あけない生物は如何しても最後は幸せに成っちゃう
んかなあビット数少ない意識は持続するしかなく永遠越えル
ティーン人生おやじ涅槃でまってるでなくここで待つ永遠は入
れられない氷河が来るのをここで待つているそして薄汚れた思
い出今だけはない少し遅れるそこに永遠が入り拡がるでも今を
ずれたここで待つてる何も入り込めないここで待つている

永遠過ぎてごきげんよう
また会いましたね五分前に
僕は六十一歳じゃない
六億八千五百歳なんて吉本新喜劇みたい
事言ってる知らないうち永遠に
死んじゃってる？希望も
気懸り十六のデート前夜の黒さ
全く同じだ定性か物質のような
百歳少年の恐怖は
死んじゃってる！

からの生物の意味論宇宙

0
含む宇宙平行する笑い始めるのは生きている俺だ

ゲラゲラゲラ星の瞬く腹底より人の

ああ馬鹿この宇宙じゃ一番美しい牢

抒情小曲集
ショートのピース

高塚謙太郎

- No22
- No23
- No24
- No25
- No26
- No27
- No28
- No29
- No30
- No31

ひろい夏草のめも
あたたかな百舌鳥に
ちなみ

うちぎわに陽

の砂浜にちぢに

みたこともないすがたから

くれないの衣擦れと

同音の

まがまがしさからくれてゆく

かなかなとかきはじめた

No23

ひまをもどす

旗色をまくこと

にあわいに

おいたつ黒髪の
まり

茶碗のかた方をまわす

ひまわりの方に

おいたち

をあやなすの花とちれ

口もとからいろなさぬ

No24

こくこくと命のおと
づれめにそう破線からは
やくも

射鶴

ひところ のためらい
きす

しのみだれ

えすの線にそう
字のしたたれて
おとなしやみせん

そこもなくぬけ上がり

湯気にもえかくれ

する柑橘の茶

づくの夕暮れ

ぶんぷ句茶葉魔

ひとこえにしきのくぐりを

羽織り

ものののはな

いちげんの葉のなな

たかくたかく透り

そまる

いすいかにひき

蚊やりのそでの

ひとつぶの火花しづく

めの夏やすみ姉さん

まげにあこがれ

のぼっていった峠のみちすじ

たつた山と

わになつてダンスメンス

酔ぶくれて

せんじゅのほそい

千体のはつ

辣のはな

もじずりのころも

かわはちすじにまもり

わかほうちじにめもり

みだれに笑う

しょうじょうとよるの弓

はるのあさつゆの

おきぬけに水

あした
つみれは傘のいろ
だんだんと余白
のいろ
みだれ餌を
くいなの甘納豆
かきこみ一揆しまつに
追われ
めの敵に
にているあちら

みなみなを
むなもしりつつ
まさぐるさきから
したたる鴉ざくらに
まくらかなかな
なかなかに恋ははつもの
いたづらついで
襲名の
こうじょうに咲く
女郎花

もるといふ土の
平行な愛

さしの入ったもり
より出てくるこれらの
愛

は水面にもるしづく
うずもれた土から
見いだされてはく
いきすだま
かがみのおおきな

ひとすじのこえをのばさず
いくえものかえるなみ
のすすぐにも

ういこえがのびる
ちぢ

こまるながさの
をむなもしのつづつづ
いろにおいたち

五月まつ花橘の
うしろすがたにまつげみえ

港のひと

甘楽順治

ひとの後頭部に舟がへばりついている
生き物だからぶかっこうなのはやむをえない

(きのうの豚屋の火事はすごかったな)
舟をぶつけあって夜通しこうふんしていた

沖では死んだものらが
今でも空への荷揚げをおこたらない

(もりのこかげでどんじゃらほい)
どこにも行かなくなつてよい時代があつた

微妙な時代であつた
みんな沈みながら無口な舟を出していた

その後の木

十本の木としてわたしは産みだされてしまった
その他はどれも知らないひとの持病の木だ

数をかぞえられないくるしみもあれば
見えるものになじんでいく怒りもある

(枝葉の影はとどまらずにわらっているが)

十本だからといってながい顔をならべ
のどを鳴らしているふうでもない

だつて馬ではないからね
どういう理由できみはずっと十本だったのか
燃えだすときの姿がさっぱり思いつかない

みんな黒い物音としてやってきた
それらはゆびの数とおなじであるのに
どこにも人間の左右がなかった
(どうしてなんどもおなじ話をするのかな)
やじるしは濡れたままずっとかわかない
わたしは青い火でいた
みえている方の側でひとびとはまだ歩いていたが
数えおわると
わたしたちはまたひとつの音になった
それはかわいたのどを鳴らすための生ではなく

眠ると舟になるくらしがつたわった
ひとの血のなかをゆくにはこれがいちばん

岸をわすれ かどの油屋もわすれた
江戸もギリシヤもそのくらしの血に流れつづけた

どこかに遺伝があるといえばそれはそうだろう

(しよってらあ) と若い哲人はかんがえる
虐殺というのはそういうことではない
舟になるだけではつたわからないものもある

それはしみつたれた浄土論であった
人生最後の飯に再度かまぼこが付くようなものだ

どうせ残されているのはこれっぽちの升目である
この猿のひたいほどの土地に何をささげるか
(文字通り猿をたてるのはどうだろう)

いっぽんいっぽん撫でさすりながら
びんずるさんびんずるさん
ここだけのはなしだがこんなせかいはいらさないよ
にんげん一般にそう言われてもこまるな

猿には猿の世相のことしか頭にない
その頭にあるくぼみはおまえたちが喰ってしまった
この骨はどここの骨かと社会はさわいでいる

袋にはいったままでこの日をむかえてくれた

がさごそとそちらの世はうるさくないか

気づかう気持ちはまだ残っているなら

この眉間の狭さにひとすじでよい

うんこをたらしてくれまいか

しろたえの子ども干したり空のひとだま

それならばこの袋をすなおにやぶつてもよいぞ

お袋はひくく唸りながら飛びまわる

きのうスーパーにあった春菜のような遺骸だ

念は声をたてるほどに白く大きくふくらんでいく

さしだしてはみたものの
魚にしては妙にふとくてねじれているようだ
こりやきみ まるで大根だな
植物としておよいできた経歴がひと目をひく

よし採用しよう！

きみのことはこれから恐ろしい腹蔵と呼ぶ

そら、ふくぞう、茶をもつてこい

われわれには世界観がある

そしてふくぞうは茶とともにやってくる

もちろんすべてはそこで終わってしまうのだが

これはいつぼんとられた わたしの足
つぎつぎと風景には五寸釘がばらまかれた
これでは国体もばらばらになる他ないが
おのおのがた年度末だ按ずるにおよばない
棒を振るようなつもりで一行を打つてごらんさい
われらはこの世では逆臣である
（能書きはいわないこと）
押し寄せてくるひとびとの読解とはこんなものである
つぎの電柱で潔くわかれよう
もはや言語による発電はここまでだ

雨でもずっとはれているものなあに
わたしたちは思いたらないところで

黄色く染みてはたらいっている

おのを切ることだ

てなことを言われても家族がいるし

借金もある

思いたらざごめんさい

なに、わかってくれればそれでよいのだ
わたしたちはどこまでも黄色く生存していくのだ
たべてもたべても減らないものなあに

あらためた方がいいやつのことを考えている
その男はわたしの内部を歩きまわって疲れている

いや、失敬

わたしは内部として荒らされているが

へっちら

むかし門の外で斬られたからね

そこは市役所の土地でしたか

だいじなことです、よく思い出してください

そのよく質問する男

外部できみは串刺しにされねばならない

微笑その他

微笑

牛岡

革命のための十行

木喰

点国

猫

アジサイ

脳天

下天

白楊

阿部嘉昭

微笑

ちいさく笑うと、ちいさくなる
せみのなく、くぬぎのもとの
それが わたしのたたずみかた
きのしたのそこだけ秋がきていて
ゆうぐれにはとりわけ陰がふかい
なにかのとおり道になる場はすきで
こんどはあおくもわらつてみるが
月のあることが じゃまになつて
あふれる虫の音にしずんでしまう
青くなれず、いつまでも小さく笑う

牛岡

岡に牛がみえるが
岡によって牛になっているものが
足下の岡を岡にしているともいえて
眼をつむるとそれがよくかんじられる

いずれにせよその牛の容積には
わたしと牛と岡とのあいだにあつて
どれのものでもない内観が
ただ平明に透けている

革命のための十行

はすかいいに出ているものは
どちらだつて序曲になるとおもおうが
ある日ブーメランがとぶのをみて
空を背景にしたその一軌跡に
はすかいが内包されていると知る
なんだそういうことか
ならば歯を奥ふかく舐めるのも
口中をブーメランにすることなんだ
そうやってただ自分のあたまを
わすれないようにする

木喰

半径何十キロメートル

ということがいわれるようになり
往古から境界神がやってきて

その線上をひっそりと憩いだした
めじるしの場所は貧相な百日紅

やがてくれないとしてつづく連日
いつも途中の途中でありうるよう

境界神のこじきのからだも

百日の曲に飾られてただまわる

点国

点をうったそこがひとつの国になるとき
ななめからのみおろしが拡がつてゆくのだから
野にかくれた七草もたがいをかなで
書くことだつてしずかな点前となるだろう
たがやすためになにかを立てなければならぬが
ひとしれず、わざまえは身へと反響して
けつきよくその身だけの最後のひとしずくが
たらない容積すべてをみたすのだから
書いたあとにかかわらずのこるものも
かわらぬそよぎをきわめてただ落ち着く

猫

油田とはいかなる田であるか

花あやめさくら鱒、と呪文をとなえ

しろくけふるものらであぶらくさくなつてゆく

とうにみどりだけになつた藤棚を

のれん気分でかきわけ前にできることが

雲の日は舞台からの遠国油田で

一身の火ならただ短冊のかたちに見せるが

ひるにたべたのは脳にうかぶものだけだつた

白炎の気軽さがおよそそんな郷党心なので

化けるようにもますますあぶらくさくなつてゆく

アジサイ

あのひとのなかへあのひとの名前を置いている。
それがまわりとはべつのひかりを帯びているとき
色彩球のゆるやかな回転がそこにみえ
あのひとそのものがやがて淡色に減ってくる。
六月の葉陰へたたずむ者はそんな減少によつて
さみしくてしずかな名前だけとなる。
ひかりから音へとなつかしさの基軸もずれ
わらいだけがどちらの領分をも橋渡しするものとなり
その円もすでに稜を削られたかたちだろう。
あのひとの六月はそのようにして名前だ。

脳天

味は舌から脳天を

あまく捲きあげてくるながら

あじわうときにはいつも

かるい窒息や色弱の発作におそわれる

そういう味を得るために

ハス池の夕暮をふたりさまようと

やぶれているかずかずには

うすい皮膚もするどくなつた

からだのこちらがむしろやぶけている

ような味、骨のいないバス停だ

下天

ならんですわることが

空をつきぬけるような場所があつて

そこでは眼下にたなびいているものが

なにか敗北のおもいでになる

それでもしめる下天のひとは

あふれだすむらさきをゆびさして

おもいえがく銀貨のなにほどかとおつぷやく

頂上がこれらをおぼえる涯だとして

わたしはそこでみえるものになることを

草とともにゆれながらまなんでゆく

白楊

姿になつてゐる月かげの白楊が
ひとつ、この夜の姿だろうか
ふるい色身とその一本をみとれば
風景のそこだけあまく聞えて
かどはまがつてゆかざるをえない
にげるひとまがりめぐりとなつて
たどる堀みちもどんどん青まさり
鼓動に女のうすれがはいつた
背なかももうにおいをだし
さつきみた姿をおぶつたままだ

【後記】

阿部嘉昭

十行以下の短詩を最近結構書いていてその型もさまざまに分岐している。ただし一行の字数がすくなかったり理路があまりに整然としていたりすると初読時に鮮やかさをあたえても再読の誘惑がよくなる。それで理路を部分的にうばい音楽化した短詩をここにあつめた。冒頭、「微笑」だけが昨年の作だがこれを憶い出したことが全体を決めた。

飯田保文

詩を書くのはこんな微妙な事書けるんだぜっ配偶者を獲得するんだ恋人選びの心ジエフリー・H・H・ミラーある詩賞パーティー自作詞のロックミュージシャンが分りやすい人々をねめ回し僕は日本でやりましたよびっしり女性名携帯番号金髪を奮発し日本は奇妙だ連発確かここで白日夢路加奈子版上映はでも芸術だケントデレカッタ

近藤弘文

書店で和合さんの今回の震災詩集がこの短い期間に三種類も並んでいることにドン引きしている今日この頃です。みなさん、詩書いてて楽しいですか。わたしはよくわからなくなっています。

高塚謙太郎

補注としてのあとがき

No22

夏草には芽もあれば、目もある。そこにちらつく百舌鳥に因み、波打ち際へ落ちてゆく。そのみえない姿から、韓紅、くれないの衣がかさこそと擦れていく。禍々しさからくれていくうちに韓紅がみえる。と仮名で書いている。

No23

旗幟を巻くことの間あひに、匂いたちつつ、生いたつ黒髪の鞆をつく。と点てる茶と同じ方向の向日葵に、匂いたちつつ、生いたつ散る花は、口元から辛い色がみえないから、真つ赤に見えない。

No24

脈打つ命の音の、訪れから、擦れ目に沿った点線からは、早く、八雲出づるそれを背景にして射抜かれた鶴は、人殺しのひところの躊躇い乱れであり、レースのS字に滴る音のない三味線を大人がもっている姿。

No25

湯気の間から蜜柑と茶筒が暮れていく。分福茶釜がぶくぶくとしている。その一声に四季の錦がひそみ、いちめんの菜の花、野の華。

No26

染まった丸い西瓜の椅子を如何に引くか、そこにとどまり、そこで散る火花の雫尽くめの夏だった。鬚峠の道筋のたつ、龍田山と永久に姉さん踊る輪になつて。

No27

千手観音千体の髪ははつらつと悪（辣）の華、衣川には血の流れ、若さまは見事なご最期を。狸々と音たてて夜、寄る弓を張った春の朝露の置くころ起きぬけの水はもじずりの乱れ染めにし。

No28

朝、葦鶴がいつせいに、つみれの色と笠の色が重なり、少しずつ、餌食を乱れ食い、それこそ水鶏の焼き蛤、ゆえに追われ、割れ目、に向かって目の敵うち、一揆始末。

No29

あらゆる人びとを、女文字をひなもじ、虚も知りながらも、枯らした桜を枕詞に、女文字を襲名の口上が響き渡り、荒城の女郎花というその円環。恋は初もの。

No30

平らかな愛も盛り、愛娘への眼差しも盛り、そこから生まれてくるのは、コレラの時代の愛だったり、水面張力だったり、吐く息に揺れる生き魍がひらひらと鏡に。

No31

以上を持ちまして、すぐにもすすぐつもりでいるのです。憂い、初声が、千々に、縮こまり、困る、女文字の見返り美人。

甘楽順治

今回のゲストは中島悦子さんを迎えた。これは同人が全員一致で決めた人選。同人全員がむさくるしい男ということもあつて、ゲストは女性を中心にしよう、ということになっている。といっても、口うるさい同人たちなので、お飾りのような人では誰も納得しない。達人の域に達したような強敵でなければならないのである。

今回こころよく申し出を受けていただいた中島さん、ありがとうございました。

さて今号の課題は十行以内の短詩、一人十篇以内ということであった。なんとか十篇を出したが、最初の「港のひと」と「その後の木」のふたつはすでに余所で出したものである。前者が三月の神奈川新聞、後者は『びーぐる』十一号（四月）で、実は今回の一連の短詩の流れのなかで書かれた。もつとも、連作というわけではない。枯れ木も山の賑わい、と言われても口ごたえできない。

詩誌 四囲 Vol.4 *She 4*

発行日 2011年7月15日

同人

阿部嘉昭 (あべ かしょう)

飯田保文 (いいだ やすふみ)

近藤弘文 (こんどう ひろふみ)

高塚謙太郎 (たかつか けんたろう)

甘楽順治 (つづら じゅんじ)

代表者連絡先

甘楽順治 E-mail: junji@tsuzura.com